

## 恩讐は彼方へ

8月23日は、会津戦争の最中、会津藩白虎隊士20名が自刃した日です。

会津戦争は戊辰戦争最後の舞台で、1868年8月22日から約1ヶ月間にわたり、会津藩士を中心とする旧幕府軍と薩長を中心とする新政府軍との間で激しい戦いが繰り広げられました。しかし、会津藩の劣勢は蓋いがたく、予備兵力である白虎隊までも投入し奮戦しましたが、9月22日若松城は落城し、ついに降伏します。

会津戦争の火蓋が切られるや、命を受けた白虎隊は出撃しますが各所で苦戦、中でも、戸の口原で戦った2番隊は大きな打撃を受けます。そして、若松城を遥かに望む飯盛山に落ち延びた20名は、翌23日、城より上がる煙を見て若松城は落城と誤認、自刃したと伝えられています。

会津戦争の7ヶ月前（1868年1月）、鳥羽伏見の戦いで勝利した政府軍は、徳川慶喜や松平容保らを朝敵として追討令を下します。これに対して、徳川慶喜も松平容保も恭順の意思を示しますが、新政府の会津藩に対する対応は峻烈なものがありました。会津藩主の松平容保は、京都守護職として京都の治安維持に当たった際、反幕府派志士を弾圧し、尊皇攘夷派の恨みを一身に背負う形となったことも背景として考えられます。新政府軍は、会津戦争終結後も会津戦争の戦死者などを「賊徒」として埋葬を許さず、このために長期間に渡って放置された多くの死体は風雨に晒され、鳥獣に食い散らかされる悲惨な状況だったといわれています。

このため、会津若松の市民の皆さんの気持ちの中には、いまだに、白虎隊の悲劇と共に、薩長への怨念のようなものが引き継がれているといわれています。

こうした中、先日開催された第35回全国高校総合文化祭福島大会で、福島県会津高校生と山口県萩高校生が共同で制作した「友情時を越えて今」という曲を歌って話題となりました。

会津戦争によって、今も両地域に残るわだかまりを乗り越えて、新しい歴史を築いて行こうという高校生達のメッセージです。

「信じ合えなかった日々  
わかりあえなかった思い  
すべてのことを今に託して

時を越えたどり着いた夢のかけはし」

彼らは、過去の歴史を忘れるのではなく、乗り越えようとしています。大人たちが作ってきた歴史に、新しい風を起こそうとしています。

「今ここから明日を信じ

優しい未来に向かって

飛び立とうさあ」

この歌を、高校生達が、東日本大震災と福島第一原発事故によって大きな傷を受けている福島の地で歌ったことに、大きな意味があります。

彼らなら、どんなに厳しい環境の中でも、新しい時代の担い手になってくれるに違いないと、私は心を熱くして信じています。（塾頭 吉田 洋一）